『非戦・平和への道を歩み続ける』

ご門主表白

謹んで思いますに　阿弥陀如来の智慧と慈悲は　南無阿弥陀佛の名号となって　私たちを救おうと　常にはたらき続けてくださいます
それは　智慧も慈悲もなく　自分中心の考えから　敵と味方とを区別し　憎み傷つけ合う　私たちの悲しむべきすがたを　阿弥陀如来は　ご覧になられたからであります
思いますに　人類は有史以来　幾多の戦争を繰り返し先の大戦におきましても　かけがえのない　多くの生命が失われました
しかるに今日　その痛みと悲しみから出発した　七十年間の歩みに学び　非戦・平和の決意を未来に引き継ぐために　何をすべきなのか　私たち一人ひとりが　問われています　武力による争いの解決は　深い悲しみや憎しみを残し　本当の安らぎを　もたらすものとはなりえません　この法要に際して　過去の戦争で亡くなられた　すべての方々を思い　追悼の心を新たにいたしますと共に　私たちの根本的な愚かさと　かつて戦争を支持した宗門の歴史を　深く省みて　同じ過ちを二度と繰り返さぬよう　非戦・平和への道を　歩み続けてまいります
このうえは　阿弥陀如来の　智慧と慈悲を仰ぎつつ　平和な世界を築くために　力を尽くしたいと思います
敬って申し上げます　（一部省略）

千鳥ヶ淵全戦没者追悼法要

千鳥ヶ淵全戦没者追悼法要が9月18日、ご門主ご親修により国立千鳥ヶ淵戦没者墓苑（東京都千代田区）で営まれ、ご門主が表白（別掲）で法要の意義を述べられた。終戦70年、戦後生まれの人口が8割を超える中、宗門の非戦・平和の決意を未来に引き継ぐための取り組みや参拝した人々の思いを特集する。

各教区、宗門校代表者が献華

各教区や宗門校の代表者は法要に先立ち、非戦・平和への思いを胸に献華した（写真上）。
千代田女学園（東京都千代田区）や国府台女子学院（千葉県市川市）、中央仏教学院通信教育同窓会関東支部の混声合唱団「衆会」などによる聖歌隊が仏教讃歌「みほとけは」「追悼の歌」を斉唱する中（同下）、献華の列が進んだ。

一人ひとりが問われている

相愛中学が研修旅行で

昨年から、法要に合わせ2泊3日の研修旅行を行い、築地本願寺（東京都中央区）に参拝し、国会議事堂で模擬国会を体験した。
宗門校の相愛中学校（大阪市中央区）は2年生が研修旅行で参拝した（写真）。同校は

恒久平和願い各地で「平和の鐘」

「平和の鐘」が午後1時15分。国立千鳥ヶ淵戦没者墓苑に鳴り響いた（写真）。
各地の寺院も、法要の思いを共有してもらいたいという宗派の呼びかけに応えて鐘を鳴らした。岐阜市の願誓寺（舩橋哲成住職）は門信徒と共に鐘を撞き、怨親平等の仏のみ教えが十方に広まることで安穏な世の中が実現することを願った。

終戦70年非戦平和写真パネル展開く

築地本願寺の本堂で9月17日から1週間、「終戦70年非戦・平和写真パネル展」を行った。
平和を願う70人の若者のメッセージや、宗派の非戦・平和への取り組みなどを紹介。参拝者や観光客らが足を止めて見入っていた（写真）。

参拝者の声

片岡照子さん（大阪・相愛中学2年）
当たり前のように今を生きているが、命の尊さ、戦争の悲惨さを感じた。参拝をきっかけに、平和について考え、来年は作文に応募したい。

◇

柳原裕美さん（東京都墨田区・江東学園幼稚園保護者、40）
娘の莉々花（6）と一緒に献華をさせていただいた。今の社会は大きな転換期を迎えているようだが、この子たちが大人になっても戦争のない平和な世の中であってほしい。

◇

田中利夫さん（東京都世田谷区・常栄寺門徒、92）
昭和19年にスマトラ島へ出征し、激戦の中、多くの仲間を失った。私は捕虜となり、昭和21年10月に、恥ずかしながら生きて帰ってきた。どうして私だけが生き残ったのか、今もそう思っている。この法要に参拝することが生きているものの務めだと思い、今年も参らせていただいた。

千鳥ヶ淵法要宗門校生徒作文

千鳥ヶ淵全戦没者追悼法要に向け、全国の宗門校の中学・高校生から「いのちの尊さ」「非戦・平和の大切さ」をテーマに作文を募集した。今年は、「中学生の部」は龍谷大学付属平安中学（京都市下京区）3年の船橋維さん、「高校生の部」は千代田女学園高校（東京都千代田区）1年の渡邉衣織さんの作品が選ばれた。二人は法要前に作文を読み上げた。全文を紹介する。

反戦に対する思い

龍谷大学付属平安中学校　3年　船橋　維

中学生の部

１９４１年8月23日、中国の済南陸軍病院で一人の兵士が命を落としました。享年28歳。本国に残した生まれたばかりの我が子を二度と抱くことなく、その兵士は世を去りました。孤独で、無念の死であったでしょう。生きてもう一度、家族のもとに帰りたかったでしょう。でもその思いは果たせなかった。
時は過ぎ、残された彼の息子は立派に成長し、二人の息子を育てる親となりました。そして今では4人の孫に囲まれるおじいちゃんとなりました。実はその孫の一人が私なのです。
私は祖父から何度も聞きました。「戦争だけはしてはいけない。戦争は形式的な責任はとれるかもしれないが、人の心の傷は誰も責任をとれない」と。
日本は70年前、大きな戦争を経験しました。十五年戦争です。その戦争の陰にはいつも苦しみや悲しみがあふれていたと思います。私の曾祖父もその戦争の陰で、悲しみの中に犠牲となった一人でした。
戦争は人の思いを踏み躙り、人の尊い命を奪い去ります。そして、残された人の心にまで、深い傷を残していきます。そんなことは本来あってはならないことです。しかし日本は先述の通りそれが起こってしまった苦い経験をしています。その反省を活かし、戦後平和国家となったのです。ですから、その平和という思想は今後、我々日本人は決して忘れてはならないのです。再び戦争の惨禍で苦しむ人が、日本から出てはならないのです。私たちはそれを後世に伝える重大な責務を背負っています。戦争を始めるのは国ですが苦しむのは我々国民です。ですから私たち一人ひとりが戦争の残忍さを直視し、反戦の意志を貫かねばならないのです。
二度と私の祖父や曾祖父のような思いをする人が出てこないよう、私は今後も反戦の考えを変えるつもりはありません。

生きて帰ってきてごめんなさい

千代田女学園高等学校　1年　渡邉　衣織

高校生の部

終戦から今年で70年。私は、この作文を機にもう一度戦争について考えようと思いました。私が小学校高学年の時の夏。私は両親と沖縄旅行に行きました。私はその時に行ったある場所で、沖縄の地上戦の悲惨さと太平洋戦争、そして戦争そのものの悲惨さを知りました。
「ひめゆり平和祈念資料館」。ここには沖縄戦中、看護師として懸命に働いたひめゆり学徒隊の学徒や教師たちが祀られています。ひめゆり学徒隊の方々は今の私とほぼ同い年で看護師として戦地に赴き、最終的には教師・学徒240名のうち136名が亡くなりました。私は136名全員の遺影を見た時、涙がこぼれました。
学徒隊の方々と年が近かったからというのもあるかもしれません。しかしそれ以上に、生きたくても生きられなかった。そんな悲痛な叫びが遺影から聞こえてくるようで、私は胸がしめつけられるような気持ちになりました。生きたい。生きていたい。生きたかった。この言葉はどんな言葉よりも重く私の心に残りました。
もう一つ、私はテレビのドキュメンタリー番組で聞いた、生きて日本に帰ってきた一人の兵士が言った言葉に衝撃を受けました。「生きてごめんなさい」。私はこれを聞いた時、とても驚きました。私ならきっと、「生きてよかった」と思ってしまうと思います。しかし、亡くなった戦友のことを思うとそう言うほかなかったのかなと思いました。そして、「生きていてよかった」ではなくて「生きてごめんなさい」と謝罪の心でこれから先、生きざるをえない状況を作りだしてしまった戦争を私は心から憎み、改めて二度と起こしてはいけないと強く思いました。
戦争は何も生まない。沖縄の時も、そして今も。戦争を知らない世代だけれども、ひめゆり学徒隊の方々や兵士の方々が伝えたかった本当の気持ち、そしてこの悲劇を二度と繰り返してはいけないという訴え。私たち若い世代が未来永劫語りつがなければいけないと思います。